

「私も大変だけど、私よりも幼い子どもたちはもっと大変。保母さんになるといふ夢をかなえたい。親を失ったから短大に行けるかわからないけど、復興のために自分ができることをしたい」

震災後、はじめて被災地に入ったときに宮城県石巻市で出会った女子高生が私に語った言葉です。自分もつらいはずなのに、避難所で子どもたちの世話をする彼女と話して感じたのは、被災した子どもたちは日常を失ったからこそ日常のありがたみがわかる、ということでした。

多くのものを失った子



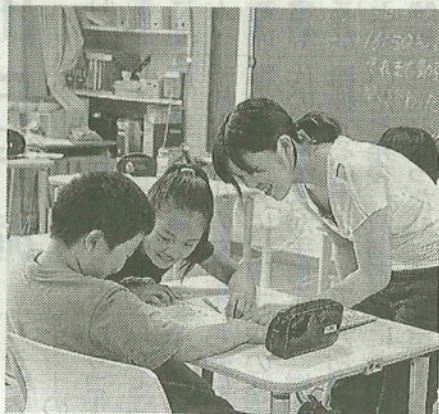
NPO法人カタリバ
代表理事
今村久美さん

東北復興日記

23

日常失った子どもも支え

子どもたちの中から、十年に、同県女川町に「女川 去年三月、生徒たちが卒業後に日本を支えるイノベ 向学館」を、十二月には 業式で「震災で多くの人がター(革新者)が生ま 岩手県大槌町に「大槌臨 と関わって、自分が支援されてくるはず。そう考 学舎」を開校。津波で家 する側に回りたと思うえ、放課後学校「コラボ や塾を流された子どもた ようになった」と言っスクール」をつくりま ちに学習指導と心のケア した。二〇一一年七月 を行っています」写真。



「もっと学びたい。世の中のわからないことを知るために大学に行きたい」という子どももおり、日常的な居場所での出会いの機会をつくす。前向きに頑張っている子どもたちの姿はとても頼もしいですが、ふとした瞬間、ポキンと折れそうなるさも感じます。

将来の夢や可能性をあきらめることのないように支援していくのは大人の役目だと思っっています。今、大人たちはがれきの行方も決められずにぐずぐずしていますが、子どもたちの心の復興が着実に進んでいることが大きな希望です。地域の将来を担う人材として育っていけるように、教育という側面から息の長い支援に取り組んでいきます。

この連載は、東京のNPO法人「女子教育奨励会」と、被災地の女性たちが協力して復興に取り組む「結結プロジェクト」の協力を得て、掲載しています。